やまなし
医療最前線
コロナ収束の鍵
県立中央病院から
〈223〉

最後のとりで 対策徹底
「がん診療と両立」実践

新型コロナウイルスへの対応と並行して通常診療を続ける取り組みが欠かせない。山梨県立中央病院は、新型コロナの重症患者を中心に受け入れながらも、がん診療機能を維持してきた。今後、ワクチン接種した全職員を対象に抗体の有無を確認し、さらに院内感染リスクの減少に努める。

4月1日に就任した中込博院長は「前院長が職員と一丸となって進めてきた新型コロナ対策を引き継ぎさらに推し進めていく」と力を込める。

中込博院長

県立中央病院が新型コロナの患者を受け入れたのは昨年2月11日、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗船者が始まり。これまでに155人（4月末現在）の患者の入院治療を行ってきた。同院は病状が悪化した患者を中心に受け入れる重点病院という位置づけで、中等症・重症の患者は91人（58・7％）を占める。

中込院長は「新型コロナの『最後のとりで』としての役割を果たしてきた」と強調。PCR、抗原、抗体検査を駆使して患者の病状を把握することで、重症化を抑える治療手段も見えてきたという。

全国をみると、新型コロナ対策に追われたことにより、がん診療には向かい風の状況だった。都内のがん専門病院では手術件数が3割ほど減少。がん検診を控える動きもあり、がんの発見が遅れる懸念が根強い。

県立中央病院のがん手術は、コロナ禍にあった2020年が7371件で、前年の7437件とほぼ同数だった。1カ月当たりの通院化学療法は20年が前年の875件から5・7％増の925件で、がん診療機能を損なうことはなかった。

同院は入院患者全員のPCR検査を早期に導入し、発熱患者と一般患者の診療を分けるゾーニング態勢を取った。職員の健康管理も徹底したことで一般診療を制限することはなかった。

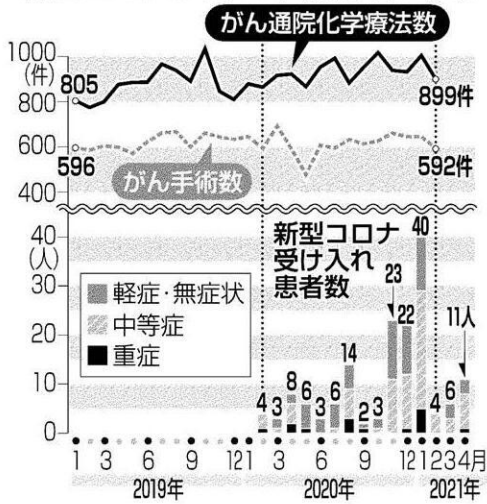
中込院長は「職員が統合された『ワンチーム』として24時間365日、頑張ってきた成果」と話す。

それでも、患者と長時間の対面を必要とするがん相談、遺伝カウンセリングなど一部では制限を余儀なくされた。テレビ電話やオンライン会議の活用を進めているが、以前のやり方が通用せず新型コロナの影響の大きさを感じることもあるという。

中込院長が打開の鍵と考えているのはワクチン。医療従事者の先行接種が進められているが、同院はさらに接種後の全職員を対象に抗体検査を独自に行い、ウイルスに対する抵抗力をチェックするという。中込院長は「感染しない、感染させない対策を進めることで、患者に寄り添う医療が提供できる」と力を込める。

＝「コロナ収束の鍵」シリーズはいったん休止します。次回は5月27日に掲載します。

山梨県立中央病院がん診療機能と新型コロナウイルス入院患者の推移



掲載日：2021年05月13日／ぶんくら／紙面頁009
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社